



育成センター

こうほう

発行元 板野東部青少年育成センター組合
 板野郡北島町中村字上地23番地1 北島町役場5階
 TEL:698-3440 FAX:698-8810
 相談電話:698-8780
 E-mail:itanotobu-ikusei@mb.pikara.ne.jp

《インターネットの利用について》

育成センターでは松茂町・北島町内の小学校5年生、中学校2年生に協力してもらいインターネットの利用状況についてアンケート調査を実施しています。令和8年6月に行った結果についてご覧ください。

Q あなたは、自分専用のスマートフォンを持っていますか。

回 答	小学校	中学校
①持っている	52.1%	90.0%
②持っていない	46.1%	7.2%

※「①持っている」と回答した人には以下の質問に答えてもらいました。

Q あなたが所有しているスマートフォンは、フィルタリングを利用していますか。

回 答	小学校	中学校
①利用している	20.7%	53.4%
②利用していない	22.3%	8.4%
③わからない	54.7%	36.8%

Q あなたの家庭では、スマートフォンの使い方について、ルールを決めていますか。

回 答	小学校	中学校
①決めている	78.2%	63.2%
②決めていない	19.0%	35.5%

過去のデータと比較するとスマートフォンの所持率については、年々増加傾向にあり低年齢化が進んでいることがわかりました。またフィルタリングについて設定の有無について把握していない割合も一定数いました。

インターネット上のトラブル（闇バイトへの勧誘を含む）への質問についてはごく少数ですが経験したことがあるとの回答があり、スマートフォンやインターネット機器への利用時間や閲覧サイト、アプリ、課金を制限・管理するためのペアレンタルコントロール機能を活用するとともに、親子で話し合っ家庭でのルール作りを進めてほしいです。

育成センターでは今後も子ども達が安全にインターネットを利用できる環境作りに努めていきます。

《リーダー養成研修会》

リーダー養成研修会は、7月27日（月）北島町役場で開催し、松茂中学校・北島中学校の2年生23人が参加してくれました。

今回はフリーアナウンサー・キャリアコンサルタントの藪田ひとみさんを講師としてお呼びし、「聴くから、伝わる！仲間と絆をつなぐ『次世代リーダー』の話し方・伝え方教室」のテーマでお話をうかがいました。その中で印象に残ったことを紹介します。

言葉は使い方によって相手の感情を良くも悪くもするものです。自分の気持ちや思いを伝えるためにも相手を理解することが大切です。そして話をする時は結論から伝えることと相手の気持ちになって話すことで意図や思いが伝えやすくなります。

お話の他にも生徒同士が身振り手振りだけで誕生日順に並ぶバースデーラインやあいさつをする態度で印象がかわる体験、はっきり話せるようになる発音練習、グループごとの共通点探し等を行いました。他にも相手の印象に残る自己紹介を作るコツは、AIにはできない自身の経験から感じたことを自分の言葉で考えてみようという紹介がありました。

最後に藪田さんからのメッセージとして、日頃から「相手の話に耳と心を傾ける。」「相手の立場になり、分かりやすく伝えようと心がける。」「共感する。共通の話題に入る。」ことが肝心だと教わりました。聞き取りやすい声や生き生きとした表情、身振りもあわせてできると印象はがらりと変わるので、笑顔と自信をもつことが大切になるとのことでした。

中学生の皆さんには今回の研修で学んだことを、これからの学校生活に活かし幸せな生き方ができるようになってもらいたいです。

《非行防止作文》

青少年の健全育成及び非行防止作文について、管内の中学校2年生から募集をしました。選考の結果、次のとおり入賞者が決まりました。裏面に入賞作品の一部を掲載していますので、ご覧ください。

最優秀 「ネット社会と私たちが守るべき人権」

松茂中学校2年 神田 麗央

「言われた側の気持ちも考えて」

北島中学校2年 森 心那

優 秀 「誹謗中傷のおそろしさについて」

松茂中学校2年 岩井 奏

「言」ことのは」

松茂中学校2年 米崎 天伽

「世の中の偏見と私にとっての普通」

北島中学校2年 中野 桜花

「便利さの裏にある人権問題」

北島中学校2年 片山 絢菜

令和8年度 非行防止作文 入賞作品

『 ネット社会と私たちが守るべき人権 』

松茂中学校2年 神田 麗央

私たち中学生にとって、インターネットやスマートフォンは、もはや生活の一部というよりも、生活そのものと言ってもいいくらい身近な存在になっています。小学校の高学年や中学校に入学したタイミングで自分のスマホを持たせてもらい、世界が一気に広がったようなワクワク感を覚えた人は多いと思います。私もその一人でした。いつでも友達と会話ができ、知りたい情報を一瞬で検索し、面白い動画が無限に流れてくるスマホは、まるで魔法の道具のように思えました。学校の休み時間や放課後の話題も、ネット上のトレンドやSNSの投稿に関するものが大きな割合を占めています。しかし、スマホを使い始めてしばらく経ち、ネットの世界に慣れていくにつれて、私はその便利さの裏側にある「冷たさ」や「怖さ」に気づくようになりました。特にSNSのタイムラインや、動画のコメント欄を見ていると、思わず目を背けたいような言葉が毎日のように飛び交っています。特定の国や地域の人々に対する差別的な発言、誰かの容姿や性格を激しく攻撃する言葉、そして個人の尊厳を傷つけるような誹謗中傷。それらは、現実の世界で直接言われても誰もが深く傷つき、立ち直れなくなるような残酷な言葉ばかりです。なぜ、これほどまでにインターネットの世界では、人を差別し、傷つける言葉が溢れてしまうのでしょうか。便利で楽しいはずの場所が、誰かの人権を脅かす刃の街に変貌している現状について、私は強い危機感を抱くとともに、自分自身の向き合い方についても深く考えざるを得なくなりました。ネットの怖さは、顔や名前を隠せる匿名性にあります。画面の向こうの相手が見えない安心感から、現実では言えないような差別発言やきつい言葉を平気で書き込む人が多すぎると思います。学校のグループラインでも、誰かの一言をきっかけに、特定の友達をからかう空気が生まれることがあります。相手の傷つく表情が見えないからこそ言葉の暴力はエスカレートしやすく、本当に恐ろしいと感じました。この問題を解決するために、私たちはスマホで「送信ボタン」を押す前に、必ず一呼吸置いて考えるべきだと思います。画面の向こう側には、自分と同じように悩み、傷つきながら生きている人がいます。自分が言われて嫌な言葉は絶対に書き込まないルールを、一人ひとりが心に持つことが大切です。そして、ネット上で誰かが叩かれているのを見ても、安易に同調したり拡散したりしない強い意志を持ちたいと思います。インターネットは世界中の人と優しくつながれる素晴らしい道具です。それを誰かを差別し、排除するための凶器にしないために、まずは自分自身の言葉に責任を持とうと思いました。相手を思いやる気持ちを忘れずに、誰もが安心して過ごせる優しいネット社会を、私たちの手で築いていきましょう。

『 言われた側の気持ちも考えて 』

北島中学校2年 森 心那

学校の休み時間、だれかがだれかをいじって笑いが起きることがある。ちょっとした失敗や外見などをネタにして、それを聞いてみんなが笑う。それは一見仲が良いと思いがちだ。しかし、笑われた中心にいる人は本当に心から笑っているのか疑問に思った。そしてそれは私自身の身にもおこりうることもかもしれないと思った。

「いじり」と「いじめ」の境界線はどこにあるのだろう。周りの空気に流されて、自分の気持ちをかくしてしまった出来事をきっかけに、私は深く考えるようになった。

それは、休み時間、友達としゃべっているときのことだった。友達に失敗談を話すと、「それはおかしすぎるだろ。やばすぎ。」と言われた。それを聞いていたみんなも笑った。言った友達の顔には悪気はなさそうで「いじり」であることは、私も分かっていた。

だけど、私は胸の奥が冷たくなるのを感じた。心の中では「そんな言い方しなくてもいいのに」と傷ついた。それでも、嫌な顔をしたりなにか言ったりしたら、盛りあがっている空気がこわれると思った。「ノリが悪いやつ」と思われるのが怖かった。

だから、私は周りに合わせて「そうよな。けっこうやばいよな」と言って一緒に笑うしかなかった。

家に帰っても、嫌だと言えずにいた自分とみんなの笑い声が頭の中からはなれなくなった。悪気のない「いじり」でも、言われた側が笑っているからといって決してゆるされるものではないのだと思った。

では、「いじり」と「いじめ」を分ける境界線はなんなのだろう。私は「言った側の意図」ではなく、「言われた側の気持ち」によって決まるのだと思う。どれだけ仲が良い友達でも、言われた本人が「嫌だ」「傷ついた」と感じたらそれは楽しいコミュニケーションではなく、「いじめ」にかわる。

人権は、一人一人を大切にし、誰からも傷つけられない権利のことだ。私は道德の授業でよく「相手の立場に立つ」や「周りの人の気持ちを尊重する」という言葉を聞くことがある。本当にその言葉どおり、生活ができているのだろうか。

私は「相手の立場に立つ」ことや「周りの人の気持ちを尊重する」ことができていないから、「いじり」がおこるのだと思う。言った側の「その場を盛り上げたい」「笑いをとりたい」という身勝手な気持ちが優先され、相手の立場に立つことを完全に忘れてしまうからだ。

今回の経験を通して、私は言葉のするどさと何気ない一言で人が傷つく怖さを感じた。

これからの学校生活では、周りの空気に流され、誰かを傷つける笑いに一緒になってしまうのをやめたい。そして、もし周りに笑って合わせている人を見つけたら、そのいじりを止めたり、笑われていた人に「さっきのいやだったよね」と声をかけられるような人になりたい。

今までの私は、場の空気をこわすのがこわくて、ただ話を合わせることしかできなかった。でも、傷ついている人を一人にしないうために、だれかがその空気を変えなければいけない。一気に全体を変えることは難しくても、一人の友達によりそうのなら私にもできるはずだ。だれもが無理に合わせることなく、ありのままの自分でいられるようにしていきたい。言われてあらためてわかった言葉の重みを心に刻み、まずは自分の「人との接し方」や「発言」から気をつけて見直していこうと思う。